

時雨

山の紅葉の見頃とともに時雨の季節がやってきた。晩秋から初冬にかけて時には降ってまた止む冷たい雨を時雨（むぐれ）という。季節が進めばミズレが混じり霰（あられ）に変わると本格的に冬の雪の季節となる。初時雨は日本列島を発達した低気圧が通過したあとに冬の先触れの寒気が襲来して木枯らしとともにやってくる。暖かな日本海で変質を受けた空気が上空の寒気との間で不安定となり対流雲を発生させる。ひと塊となった雪雲の通過でサーッと降って止み青空がのぞき次の雲でまた降る。日本海側の冬の雪降りと同じである。降りものが雪でなくてまだ気温が零度以上なので解けて雨となったものである。

時雨を予報するも厄介なことである。海面の温度とすぐ上の境界層の上の温度を考え、厚さがどうか、変質して湿った層と上空の寒気との不安定さはどうか、対流雲の厚さと流れて地形の影響のかかわりかたも異なる。舞鶴海洋気象台の堀口善一さんの京都府北部の時雨の調査によれば、北西風型の時雨は雨が強いが沿岸の地方に多く降り、丹後半島の影響で内陸深くにあまり入らず、山を越えて内陸に侵入した対流雲で降っても晴れ間が出る陽性型の天気となるという。まさに北山時雨にぴったりとの状況となる。一方北東風型の若狭湾から北よりの風系で入ってくると雨の量は少ないが、内陸深く侵入

して京都の中京区にある気象台でも終日降ったり止んだりして太陽が顔を出さないこともある。いずれにしても予報官泣かせと腕の見せどころの狭間でミズレをまじえながら時雨が舞う季節がしばし続く。

初しぐれ猿も小囊を欲しげなり

と詠まれている芭蕉の句がある。落ち葉をぬらして秋の名残りを惜しむようにサーッと降っては止んでまた降る時雨、その冷たさに風情を感じていたのであろうか。時雨といえば北山時雨が最もよく知られている。京都盆地の北側で丹波の国のほうから山を越えて雪雲が襲来する。

北山のしぐれは丹波路の風情と似ている。

…ひるまえから夜になるまで、六七時間の間に十数回時雨にあったことがある。非常に珍しいことでもない。時雨のくるまえに、池の水面がさわぎ出す。庭に降る雨がよく見えない時に、まつ雨の先づきは池の水面のさわぎで見分かれる。激しい雨となって、あたり一帯が騒然としている時、池の上は水しぶきをあげているのだろうが、殆ど煙ってしずかになって見える。

池の水は時々変化する。くろずんだ深碧の緑から、淡淡とした空の色との間の変化、雨のあととは白泥色となり、また赤褐色になることもある。太陽と月が、無限な彩りをしてくれる「保田興重郎の随筆 時雨のころ」氷魂記、白川書院）に研ぎ澄まされた感性で見事に描写している。

北陸地方をはじめとする日本海側の沿岸の街々では、シグレの季節を忌み嫌っているように思える。雪ならまだしも暗鬱な空から降る冷たい驟雨が季節の変わり目にじめじめと降り続く。爽やかな秋の名残りを残したい人間に対し、ミズレ混じりの雨で終止符とつけようとする自然とのせめぎ合いが、長く厳しい冬を前に展開する。同じ時雨でも北山時雨とは別世界のごとくなる。文字文化の中心だった古都京都に降るしゅう雨、晩秋から初冬の寂寥とした葉を落した木々と落ち葉をぬらしながら降る驟雨。行く手の空に秋の澄みきった青い空が見えていと思うたら、気がつくど頭のうへの空の半分が暗雲におおわれてサーッと降る冷たい雨。雨宿りも京都に風情といわしめた丹後の山を越えての時雨はやはり風雅な雨だったのだろう。

北山の小倉山の麓に百人一首で有名な歌人、藤原定家の隠栖した時雨亭があったという。山深い庵、枯れた木々に時雨がかかり濡れる有様はまさに風情そのもの。芭蕉も京都で庵を営み、芭蕉を敬慕した蕪村は京都の洛東で芭蕉庵を再興した。京都北山が時雨の代名詞となったのもうなずける。芭蕉の没した（〇月二日は時雨忌都呼ばれ、時雨月は陰暦10月の異称である。北山時雨は京都の晩秋から初冬の風物詩のひとつである。

時雨のように来る愛に身を焦がす初老の男と夫と離別して一人生きる中年の女性の哀切な命

を限りと大人恋を描いた、中里恒子の代表作『時雨の記』がある。舞台は鎌倉だが、京都の北山を時雨を訪れたのがその後の底流として流れる。話題の「マジソン郡の橋」とは「味もふた時も違った古風な日本情緒あふれる物語である。主人公の急死あと、追憶の思いをかつて訪れた定家の時雨亭跡で口ずさんだ。

あらざらむ

萩の葉かげのうたたねの

今ひとたびの逢うことも

なくてぞもみじ散りにける

時雨ぞもみじ散りにける

と歌に託した。時雨は、「**ハ**」は風、「**ざれ**」は狂で、風にともなつて忽然と降つて止む雨。氣象の辞典、東京堂出版」とも言われている。時雨のもつしっとりとした深い哀切な雰囲気縦糸に風、狂という激しさが横糸となつているように思えてならない。